

鹿児島県における 新型コロナウイルス感染症拡大が子育て及び子どもの生活に与える影響に関する 調査報告書（第1期：2020年8月）

はじめに

新型コロナウイルス感染症拡大を受け、親子の生活も変化を求められている。2020年4月には緊急事態宣言が発令され、新学期を挟み約2ヶ月間に渡り学校や一部の保育施設は休校となった。その後、登校は可能になったものの、行事の中止や外出の制限など子どもの生活全般に多くの影響を与えている。新型コロナウイルスには中長期的な視点で対応していかなければならないことを踏まえても、このような状況下で親子がどのような負担を抱えているのか、子どもがどのような影響を受けているのか実証的に捉える必要がある。

そこで鹿児島県に居住し、幼児および小学生の育児を行う保護者を対象に調査を行うこととした。第1期の調査として、例年とは異なる過ごし方を求められた夏休み期間を対象とした。鹿児島県は多くの離島を抱え、地理的特色も豊かで地域性も強い。鹿児島県全域の保護者の実情をとらえるため、地域の保健福祉機関や支援機関の協力を得て広範囲での調査協力の呼びかけを行った。調査結果が子どもや子育てへの支援の検討に貢献することを願っている。

1. 調査目的

新型コロナウイルス感染症の拡大とそれに伴う生活の変化が、幼児・小学生の保護者と子どもに与えた影響を明らかにすること。

2. 調査の方法

1) 調査期間、調査対象、調査方法、回収数

調査期間：令和2年8月10日～9月11日。

調査対象：鹿児島県に居住し4歳から12歳（小学6年生）を育てる保護者。

調査方法：Google Formsを利用したWeb調査。チラシ等により調査の協力と依頼を行った。回答にかかる時間は10～15分であった。

回収数：105回答。

2) 調査項目

調査票は、A. 基本項目、B. 子どもの心身の変化、C. 保護者の心身の変化、D. 新しい生活様式に向けて、に分けて質問項目を設定した。

3) 倫理的配慮

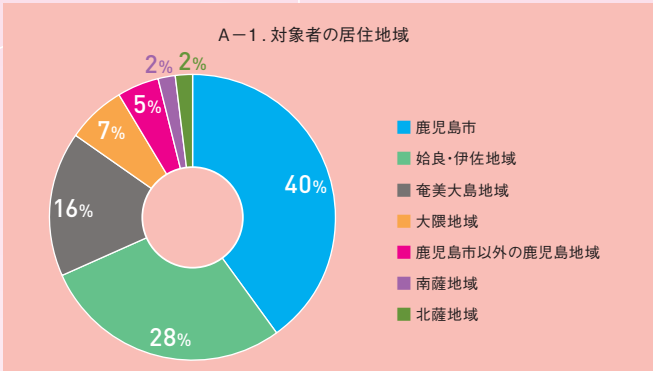
フォーム冒頭で調査目的と個人情報の取り扱いを説明し、同意が得られた方のみを対象に調査を行った。調査は無記名で個人を特定できる情報は収集せず、回答は統計的に処理を行った。

3. 調査結果

A. 調査対象者について

A-1. 対象者居住地域

調査対象者の居住地域は、鹿児島市が40%、次いで始良・伊佐地域が28%、奄美大島地域が16%であった。今回の調査では、南薩地域、北薩地域、熊毛地域からの回答は少数であった。



※各地域詳細

始良・伊佐地域：霧島市、伊佐市、始良市、湧水町

奄美大島地域：奄美市、大和村、宇検村、瀬戸内町、龍郷町、喜界町、徳之島町、天城町、伊仙町、和泊町、知名町、与論町

大隈地域：鹿屋市、垂水市、曾於市、志布志市、大崎町、東串良町、錦江町、南大隅町、肝付町

鹿児島市以外の鹿児島地域：日置市・いちき串木野市・三島村・十島村

南薩地域：枕崎市、指宿市、南さつま市、南九州市

北薩地域：阿久根市、出水市、薩摩川内市、さつま町、長島町

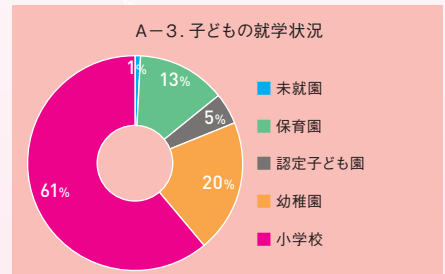
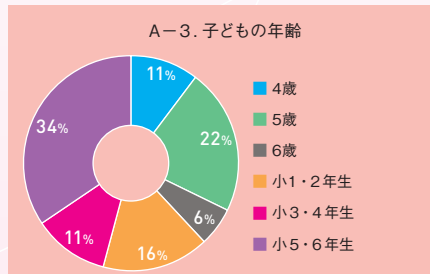
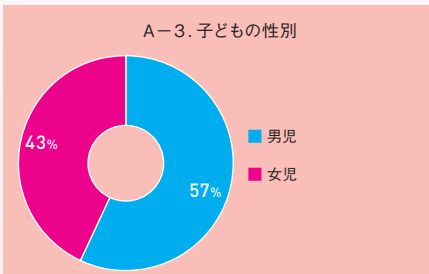
熊毛地域：西之表市、中種子町、南種子町、屋久島町

A-2. 回答者

回答者は89%が母親で10%が父親、その他が1%であった。今回の調査は母親からの回答が多いことが示されている。

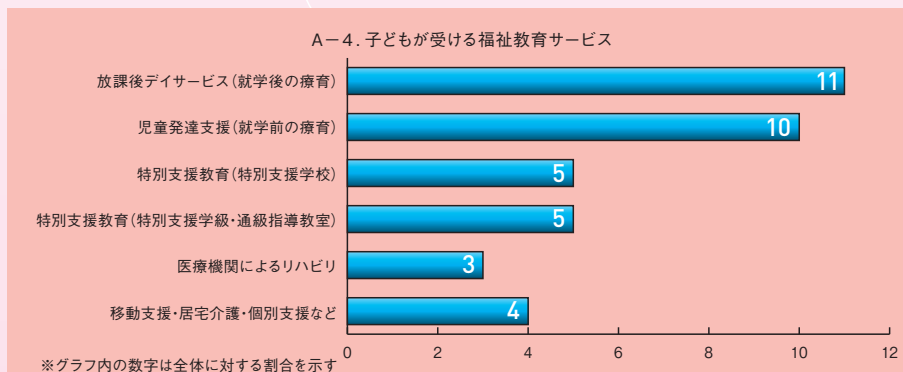
A-3. 子どもの年齢／就学状況／性別

対象となる子どもの年齢は未就学が39.4%、小学生が60.6%であった。それぞれの年齢や性別に大きな偏りはなかった。



A-4. 子どもが受ける特別支援教育等福祉教育サービス（複数回答可）

特別支援教育や福祉教育サービスを受けている児童は全体の23%であった。利用するサービスの内訳では放課後デイサービス、児童発達支援の利用が多かった。



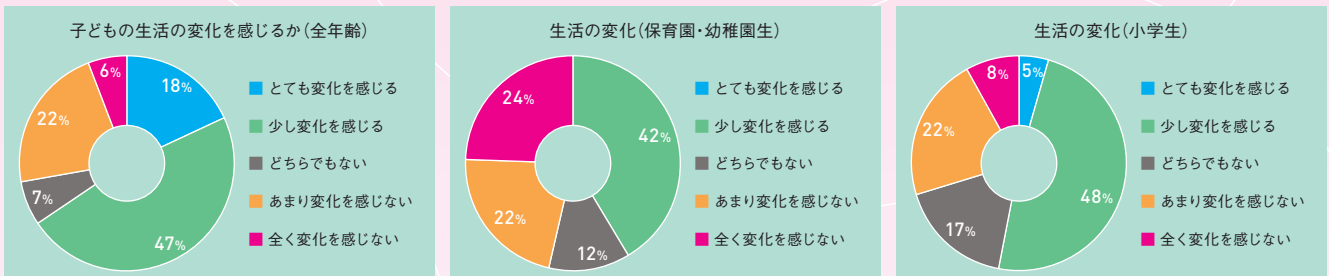
B. 子どもの心身の変化

※下記B. C. D. の結果では「とても感じる」「少し感じる」を合わせて「変化を感じる」という回答として整理した。

B-1. 子どもの生活は変化したとを感じるか？

全年齢では65%、未就学児53%に比べ、小学生では75%とより高い割合で生活の変化が感じられている。

子どもの生活の変化を感じるかどうかという質問に対し、約65%の対象者が変化を「とても感じる」もしくは「少し感じる」と回答した。未就学児と小学生を比較すると、小学生の方が子どもの生活が変化したとする回答が多かった。

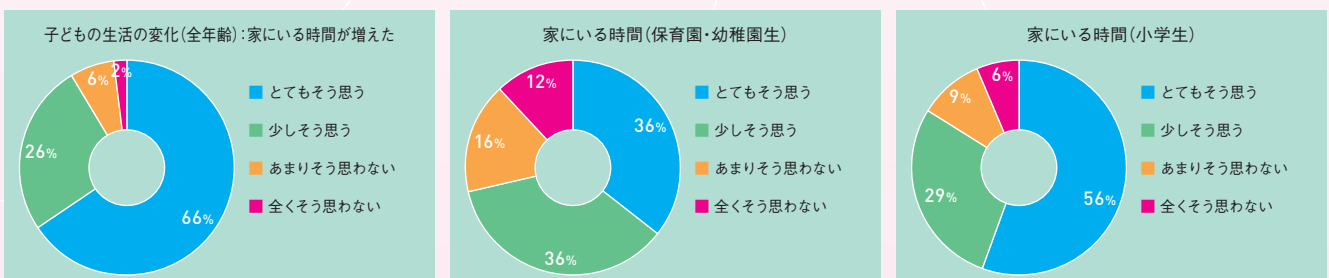


B-2. 子どもの生活の変化の詳細

子どもの生活上の変化の詳細を検討すると、家で過ごす時間、家族で過ごす時間、テレビやPC、タブレットなどメディアとの接触、家族と過ごす時間が増えていることがわかる。家にいる時間とテレビ視聴時間の増加は年齢に限らず見られているが、PC、タブレット、スマホ、ゲームの使用時間の増加は年齢で比較すると小学生の方がより多いことが示された。小学生においてより顕著にメディア使用時間の増加がみられる。下記にそれぞれの項目について全年齢のデータと未就学児、小学生を分けたデータをそれぞれ示す。

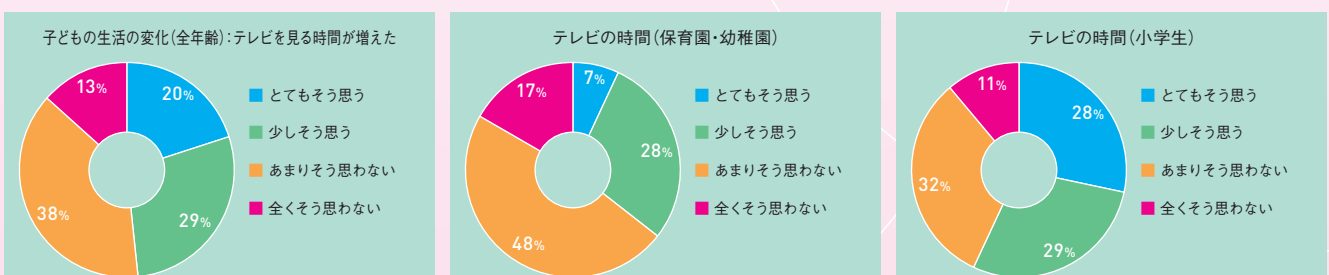
(子ども：家にいる時間が増えたか)

全年齢で92%が家にいる時間が増えたと回答。未就学児と小学生の間に統計的な差はなかった。



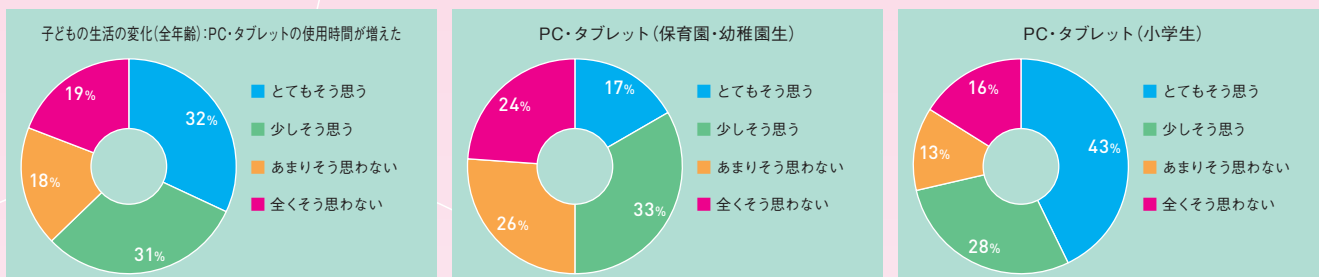
(子ども：テレビを見る時間が増えたか)

全年齢で76%が増加と回答。未就学児と小学生の間に統計的な差はなかった。



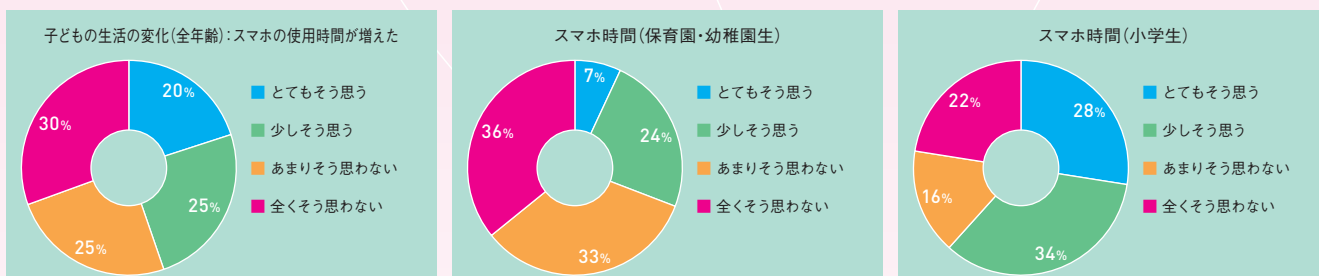
(子ども：PC・タブレットの使用時間が増えたか)

全年齢では63%がタブレット等の使用時間が増えたと回答。未就学児50%に比べ、小学生では71%とより多くが使用時間の増加を感じている。



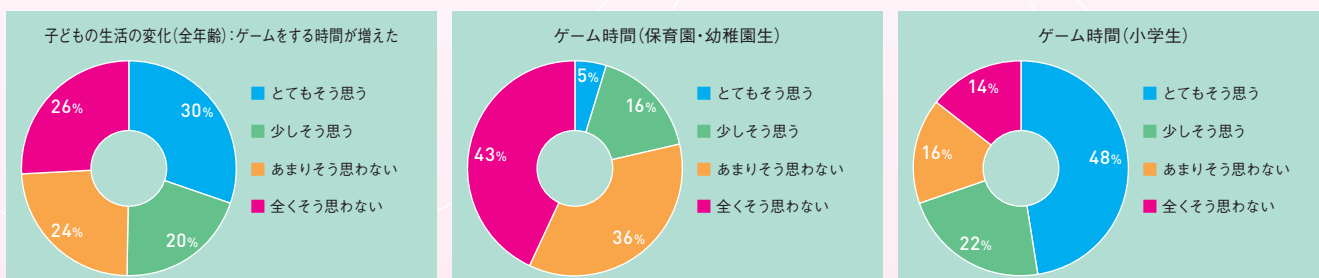
(子ども：スマホの使用時間が増えたか)

全年齢では45%がスマホの使用時間が増えたと回答。未就学児31%に比べ、小学生では62%とより高い割合で使用時間の増加を感じている。



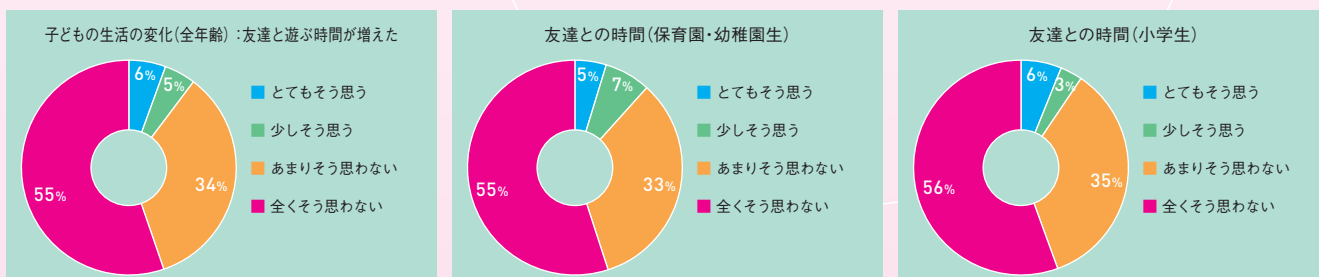
(子ども：ゲームをする時間が増えたか)

全年齢では50%がゲームをする時間が増えたと回答。未就学児21%に比べ、小学生では70%とより高い割合で使用時間の増加を感じている。



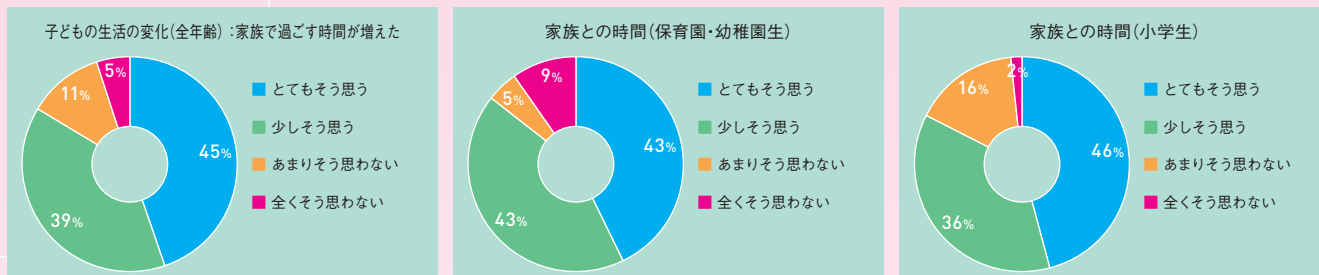
(子ども：友達と遊ぶ時間が増えたか)

全年齢で11%が友達と遊ぶ時間が増えたと回答。未就学児と小学生の間に統計的な差はなかった。



(子ども：家族と過ごす時間が増えたか)

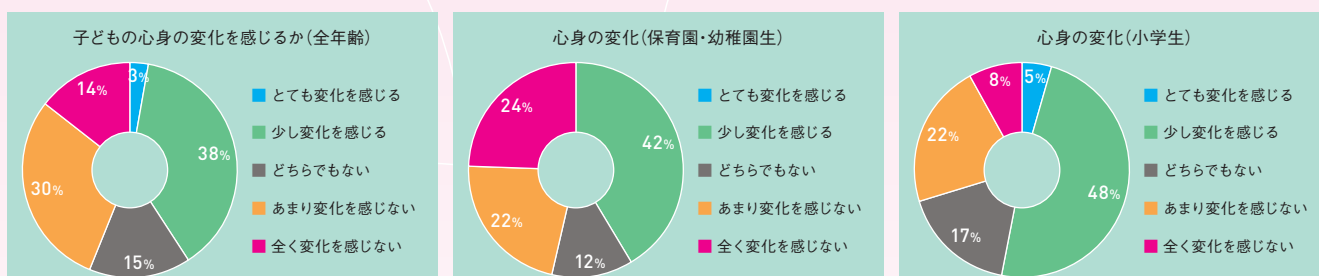
全年齢では 84%が家族と過ごす時間が増えたと回答。未就学児と小学生の間に統計的な差はなかった。



B-3. 子どもの心身の変化を感じるか？

全年齢では 41%、未就学児 22% に比べ、小学生では 54% とより高い割合で心身の変化が感じられている。

子どもの心身の変化を感じるかどうかという質問に対し、約 41% の対象者が変化を「とても感じる」もしくは「少し感じる」と回答した。未就学児 22% が「少し変化したと感じる」と回答したことに比べ、小学生では 53% が「とても変化した」「少し変化した」と回答し、小学生の方が変化を感じた回答がやや多かった。



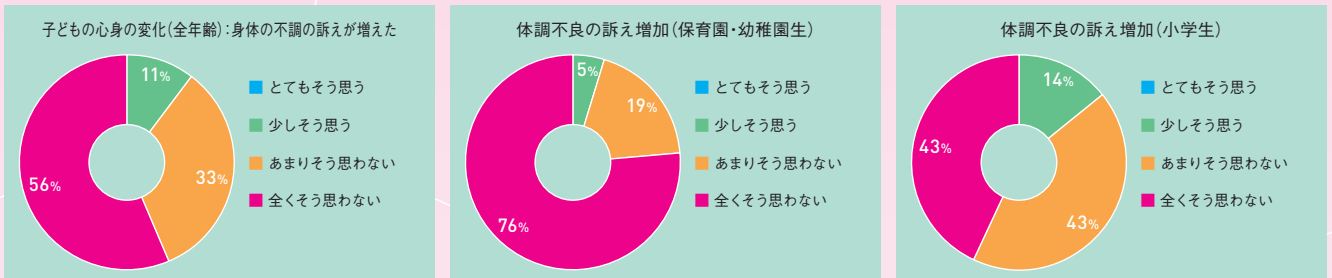
B-4. 子どもの心身の変化の詳細

子どもの心身の変化の詳細を検討すると、変化が多い順では「甘えることが増えた (40%: とてもそう思う / 少しそう思うと回答, 以下同様)」「怒りっぽくなった (25%)」「睡眠の問題が増えた (24%)」「学習上の問題が増えた (22%)」「疲れやすくなった (22%)」であった。加えて、約 10% が家族や友人とのトラブルの増加、身体不調の訴えの増加を示しており、コロナ感染症拡大以前と比べて子どもの情緒および行動に変化があったことが示されている。

年齢差を比較すると未就学児と小学生で差があった項目は「身体的な不調の訴えの増加」「睡眠の問題の増加」「食欲の変化」「通学の問題の増加」「疲れやすくなった」「勉強の問題」「友達とのトラブルが増えた」であった。通学の問題の増加のみ未就学児の方がより多く問題の増加が感じられていたが、その他の項目「身体的な不調の訴えの増加」「睡眠の問題の増加」「食欲の変化」「通学の問題の増加」「疲れやすくなった」「勉強の問題」「友達とのトラブルが増えた」は全て小学生に多く問題の増加が見られている。小学生は、未就学児に比べて行動力がつき行動範囲が広がっていた分、感染拡大による休校や外出制限の影響を受けた可能性がある。以下にそれぞれの項目について全年齢のデータと未就学児、小学生を分けたデータをそれぞれ整理する。

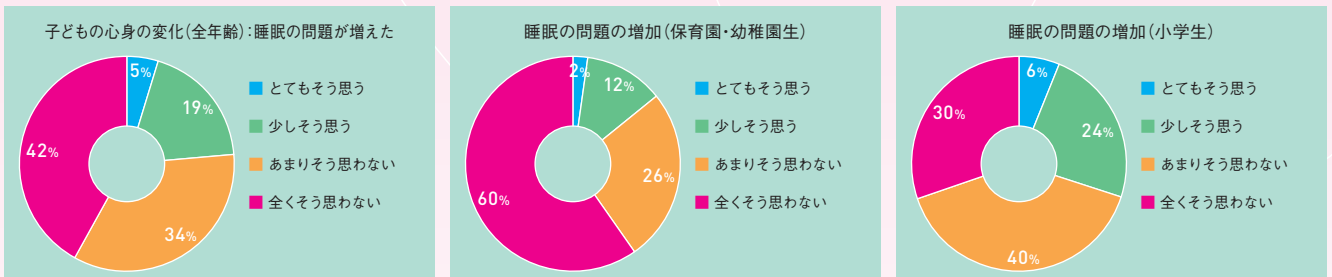
(子ども：身体不調の訴えが増えたか)

全年齢では 11%が身体不調の訴えが増えたと回答。未就学児 5% に比べ小学生では 14% とより多くが増加したと回答している。



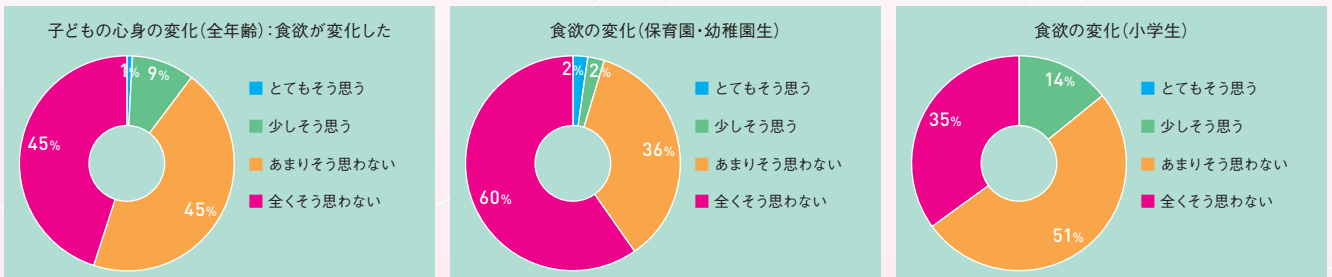
(子ども：睡眠の問題が増えたか)

全年齢では 24%が睡眠の問題が増えたと回答。未就学児 14% に比べ小学生では 30% とより多くが増加したと回答している。



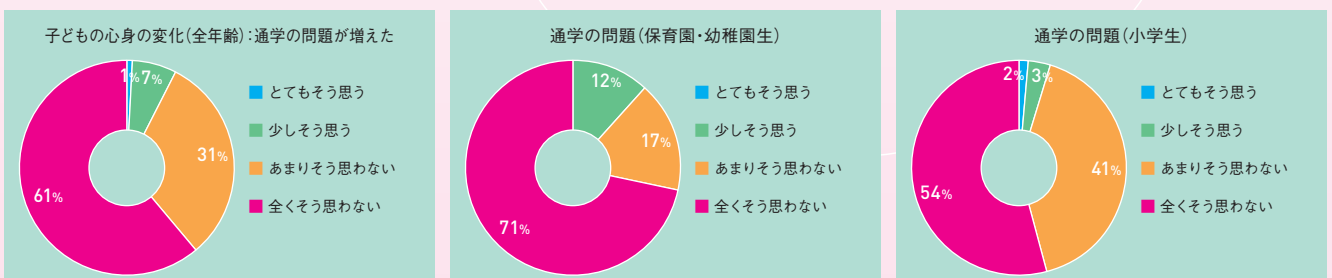
(子ども：食欲が変化したか)

全年齢では 10%が食欲の変化があったと回答。未就学児 4% に比べ小学生では 14% とより多くが変化したと回答している。



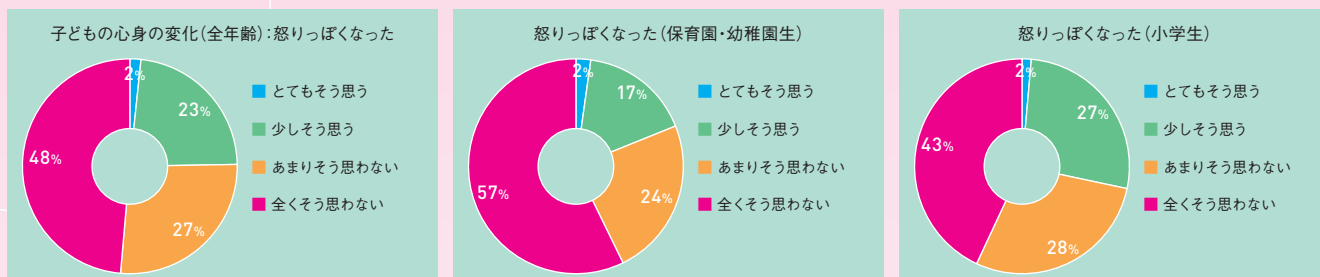
(子ども：通学の問題が増えたか)

全年齢では 8%が通学の問題が増えたと回答。小学生では 5% に比べ、未就学児 12% とより多くが増加したと回答している。



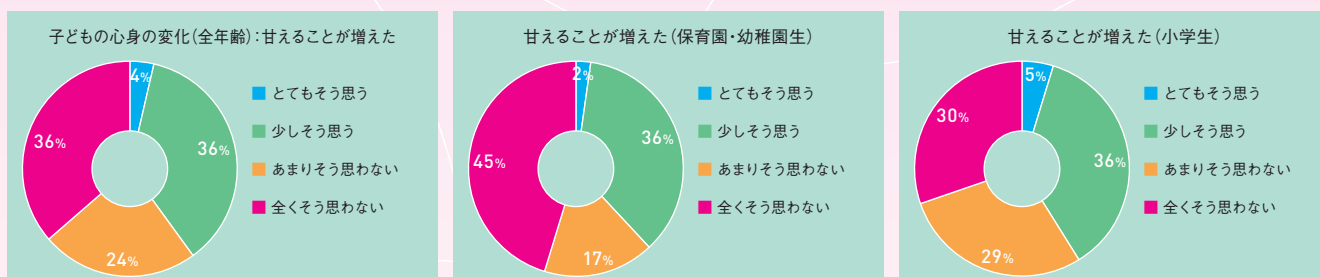
(子ども：怒りっぽくなったか)

全年齢では 25%が怒りっぽくなったと回答。未就学児 19% 比べ、小学生では 29% にとより多くが怒りっぽくなったと回答している。



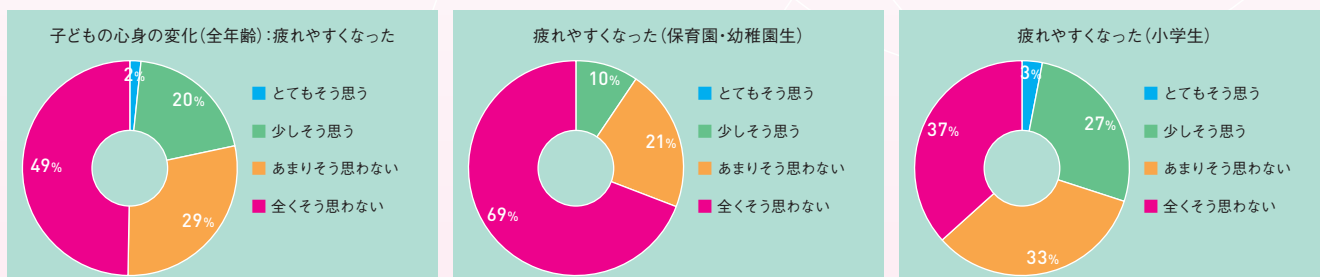
(子ども：甘えることが増えたか)

全年齢では 40%が甘えることが増えたと回答。未就学児と小学生の間に統計的な差はなかった。



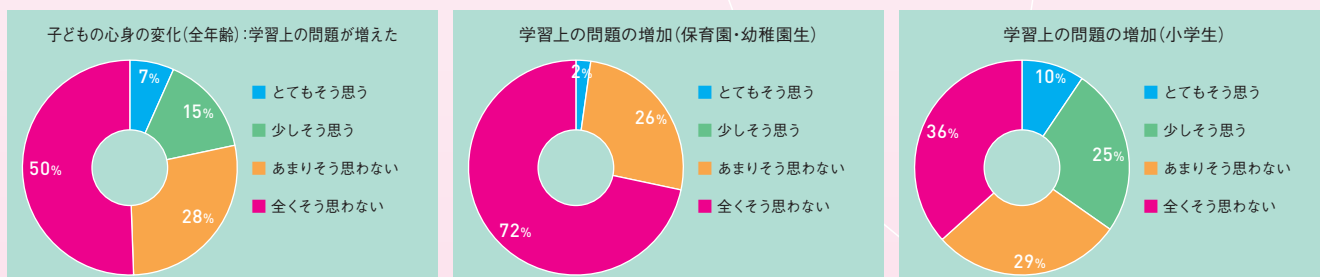
(子ども：疲れやすくなったか)

全年齢では 22%が疲れやすくなったと回答。未就学児 10% 比べ、小学生では 30% にとより多くが疲れやすくなったと回答している。



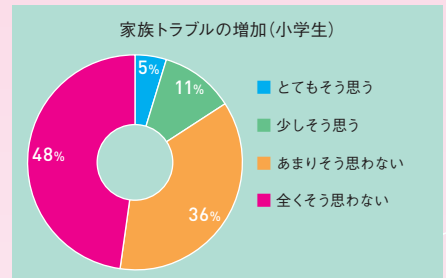
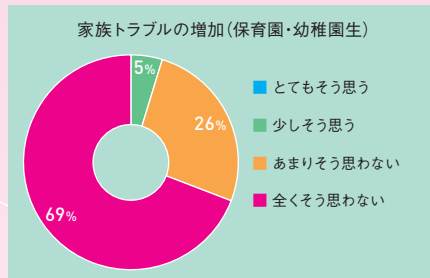
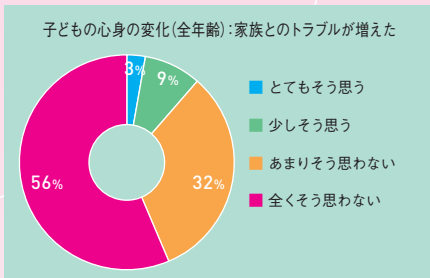
(子ども：学習上の問題が増えたか)

全年齢では 22%が学習上の問題が増えたと回答。未就学児 2% 比べ、小学生では 35% にとより多くが問題が増えたと回答している。



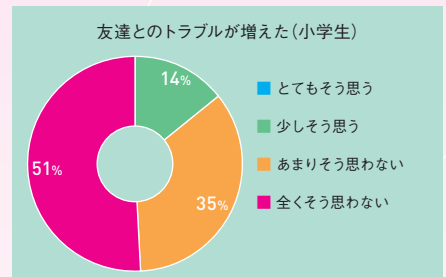
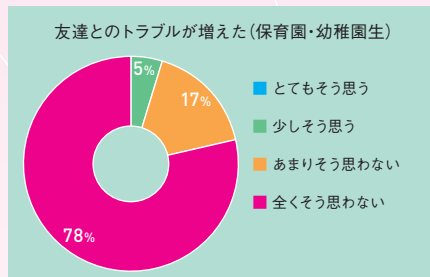
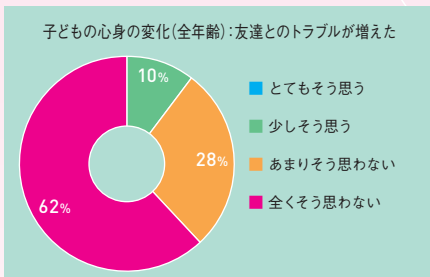
(子ども：家族とのトラブルが増えたか)

全年齢では 12%が家族のトラブルが増えたと回答。未就学児と小学生の間に統計的にはっきりとした差はなかった。



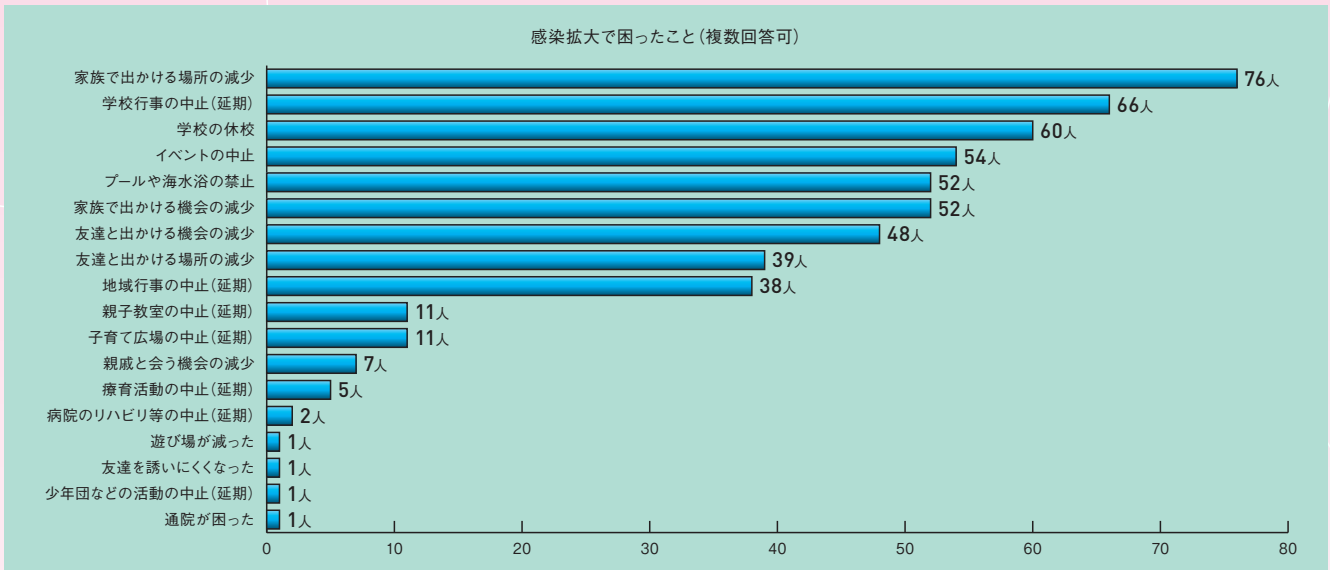
(子ども：友達とのトラブルが増えたか)

全年齢では 10%が友達とのトラブルが増えたと回答。未就学児 5% 比べ、小学生では 14% にとり多くが問題が増えたと回答している。



B-5. 感染拡大を受けて生活上困っている（困った）こと

家族で出かける場所の減少が最も多く選択された。次いで、学校行事の中止や学校の休校、イベントの中止など家族の余暇活動や熱意をかける対象がなくなってしまうことへの困り感が強いことが示された。



（困ること、子どもの変化：自由記述）

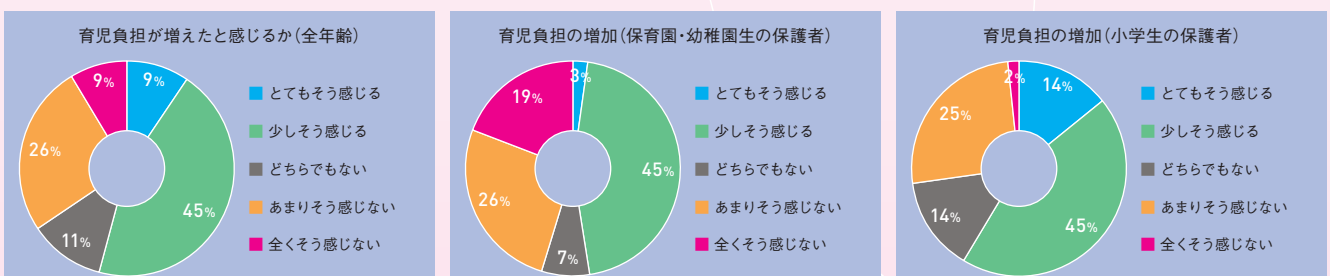
- ・行きたいところに行けずに困っている
- ・まだ幼児だが「コロナがあるから行けないよね」と自分で我慢している
- ・遊びに行きたいけど行けないことがわかっているのでイライラしている
- ・休日に友達と遊ぶなくなった
- ・思い通りに外出できずストレスが溜まっている、自律神経が乱れていると感じる
- ・友達と遊びに行くことが減り、運動不足を感じている
- ・外出の機会が減り、ゲームの時間が増え、視力が低下した
- ・外出の際は、子どもが「コロナウイルスがいるから」と言うことがある
- ・感染が怖いと外出しづらくなった
- ・運動不足で兄弟喧嘩が増えた
- ・寝言が多くなって寝付きが悪い
- ・人に会う機会が減って寂しそうにしている

C. 保護者の心身の変化

C-1. 育児負担は増加したか？

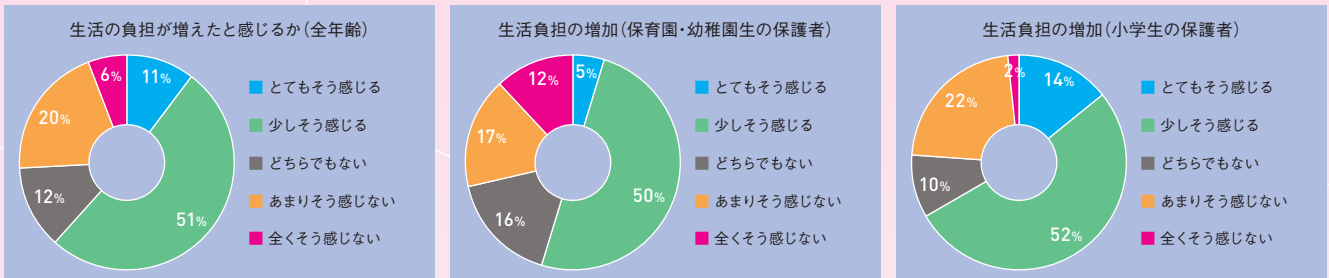
全年齢で54%の保護者の育児負担が増加したと回答。未就学児48%に比べ、小学生では59%とより高い割合で負担の増加を感じている。

子どもの生活の変化を感じるかどうかという質問に対し、約54%の対象者が変化を「とても感じる」もしくは「少し感じる」と回答した。未就学児と小学生を比較すると、小学生を持つ保護者の方が育児負担は増したとする回答が多かった。



C-2. 生活の負担は増加したか？

全年齢で62%の保護者が生活の負担が増加したと回答。未就学児55%に比べ、小学生では66%とより高い割合で負担の増加を感じているが、未就学児の保護者と小学生の保護者間で統計的にはっきりとした差はなかった。

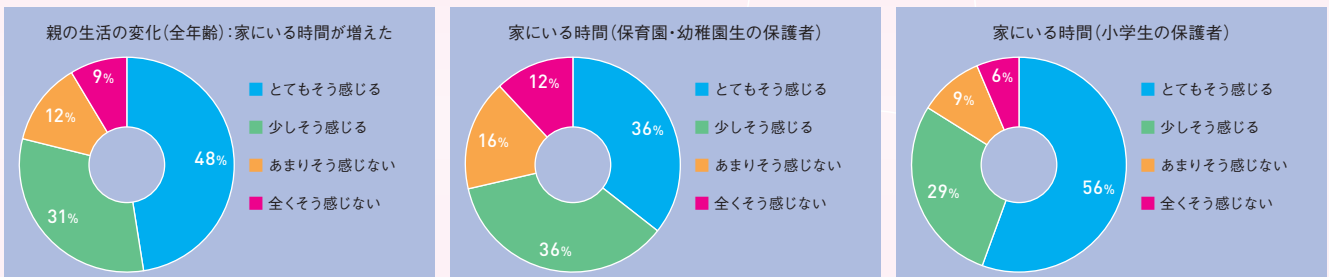


C-3. 保護者の生活の変化の詳細

保護者の生活上の変化の詳細を検討すると、「家族で過ごす時間」「家で過ごす時間」「スマホの使用時間」「PCやタブレットの使用時間」が増えていることがわかる。子どもの年齢で比較すると小学生の保護者の方がスマホ、PCやタブレット、テレビと接する時間が増加したことがわかる。下記にそれぞれの項目について全年齢のデータと未就学児、小学生を分けたデータをそれぞれ整理する。

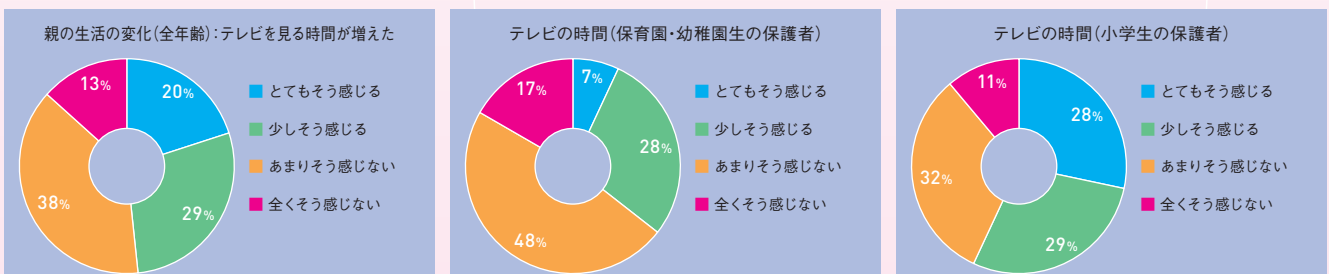
(保護者：家にいる時間が増えたか)

全年齢で79%が家にいる時間が増えたと回答。未就学児と小学生の間に統計的な差はなかった。



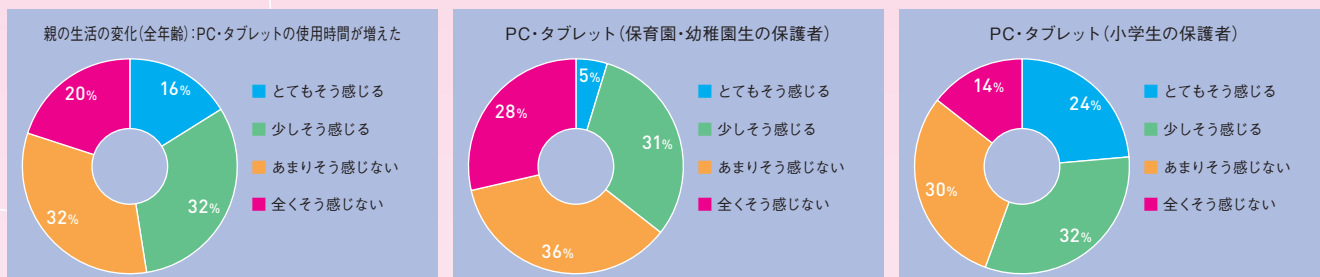
(保護者：テレビを見る時間が増えたか)

全年齢で49%が増加と回答。未就学児の保護者35%に比べ、小学生の保護者では57%とより多くが増加と回答された。



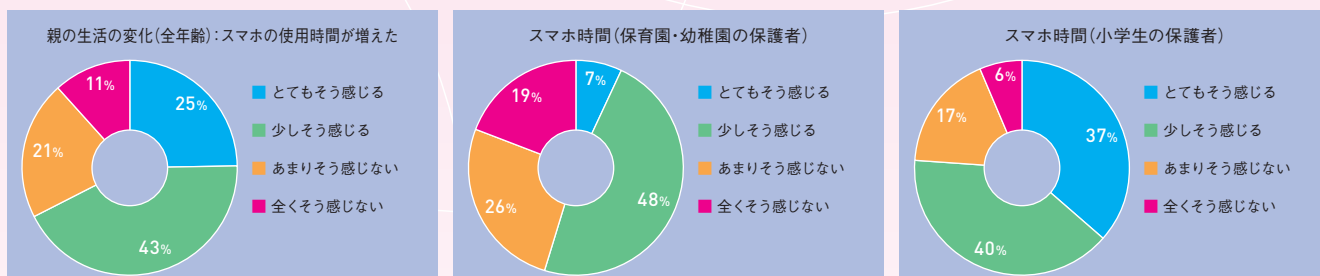
(保護者：PC・タブレットの使用時間が増えたか)

全年齢では48%がタブレット等の使用時間が増えたと回答。未就学児の保護者36%に比べ、小学生の保護者では56%とより多くが使用時間の増加を感じている。



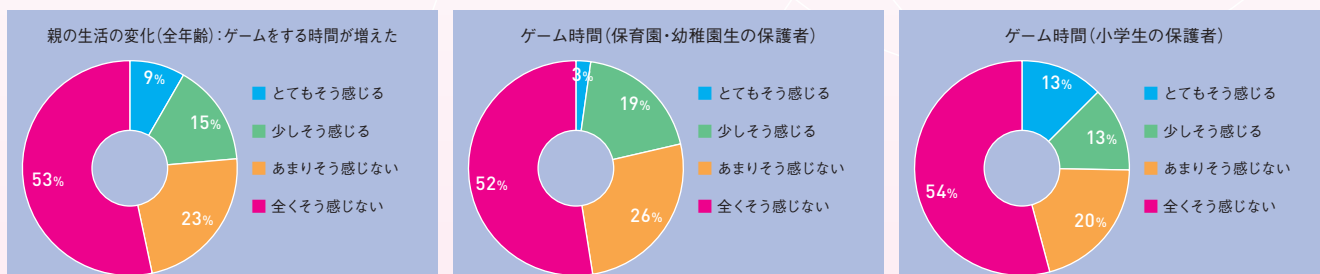
(保護者：スマホの使用時間が増えたか)

全年齢で68%がスマホの使用時間が増えたと回答。未就学児の保護者55%に比べ、小学生の保護者では77%とより高い割合で使用時間の増加を感じている。



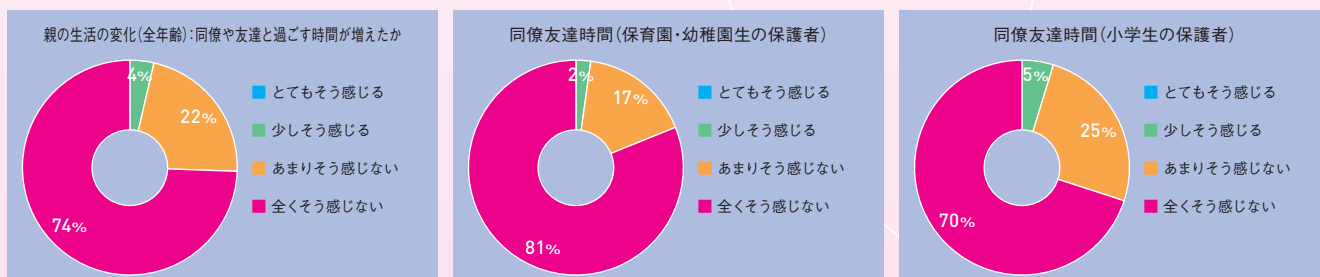
(保護者：ゲームをする時間が増えたか)

全年齢では24%がゲームをする時間が増えたと回答。未就学児と小学生の間に統計的な差はなかった。



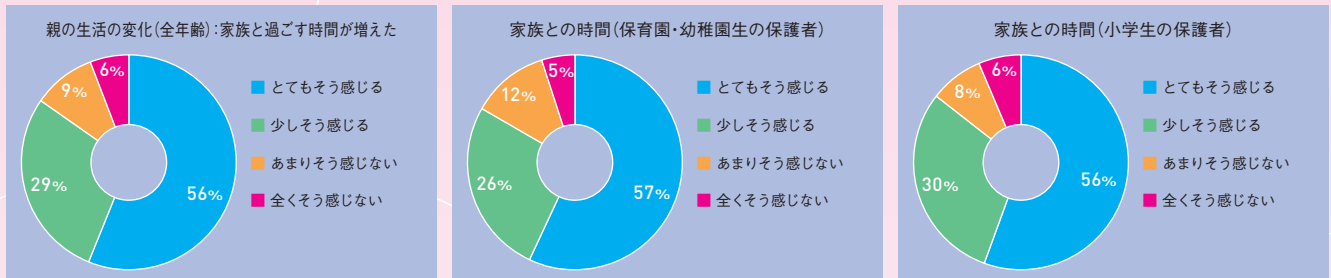
(保護者：友達や同僚と過ごす時間が増えたか)

全年齢では4%が友達や同僚と過ごす時間が増えたと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者の間に統計的な差はなかった。



(保護者：家族と過ごす時間が増えたか)

全年齢では85%が家族で過ごす時間が増えたと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者の間に統計的な差はなかった。



C-4. 保護者の心身の変化の詳細

保護者の心身の変化の詳細を検討すると、変化が多い順では「心配事が増えた(61%: とてもそう思う/少しそう思うと回答, 以下同様)」「疲れやすくなった(48%)」「身体的な不調が増えた(37%)」「睡眠の問題が増えた(30%)」「怒りっぽくなった(36%)」「業務や家事の遂行に問題が生じた(33%)」であった。加えて、約15%が「家族とのトラブルが増加した」と回答している。

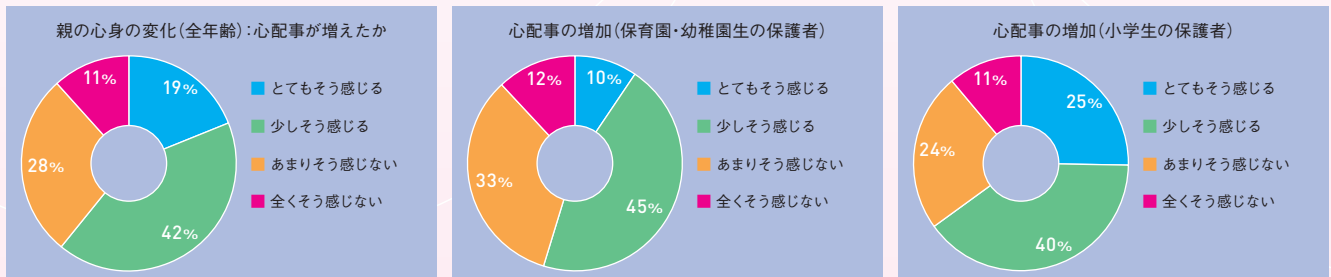
コロナ感染症拡大以前と比べて、保護者の心理的な負担は増えており、情緒及び行動上の問題が増えていることがわかる。

保護者の心身の変化に関する項目には、子どもの年齢による差は示されていない。よって、子どもの年齢に関わらず、上記の変化があると捉えられる。

下記にそれぞれの項目について全年齢のデータと未就学児、小学生を分けたデータをそれぞれ整理する。

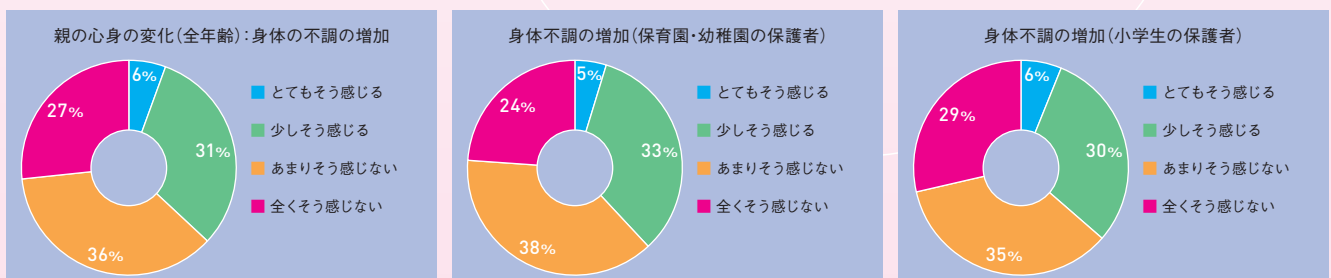
(保護者：心配事が増えたか)

全年齢で61%が心配事が増えたと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者に統計的な差はなかった。



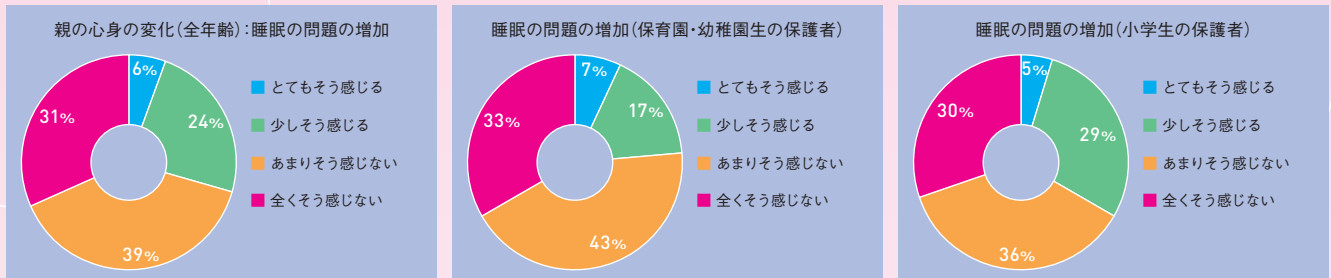
(保護者：身体的な不調が増えたか)

全年齢の37%が身体的不調を感じるが増えたと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者の間に統計的な差はなかった。



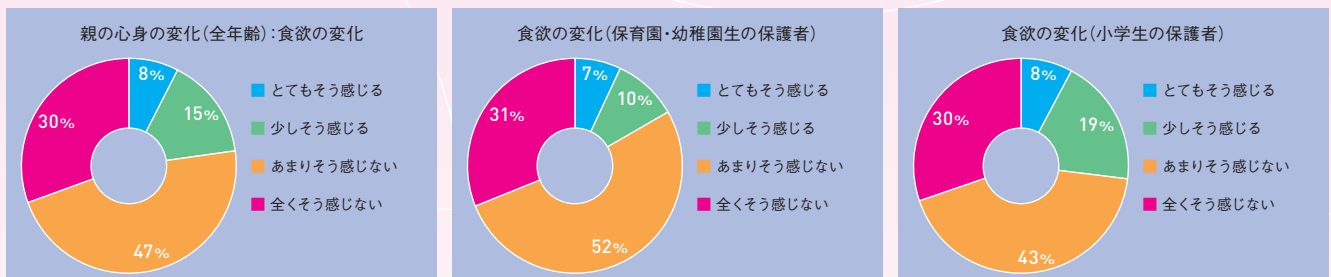
(保護者：睡眠の問題が増えたか)

全年齢の30%が睡眠の問題が増加したと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者の間に統計的な差はなかった。



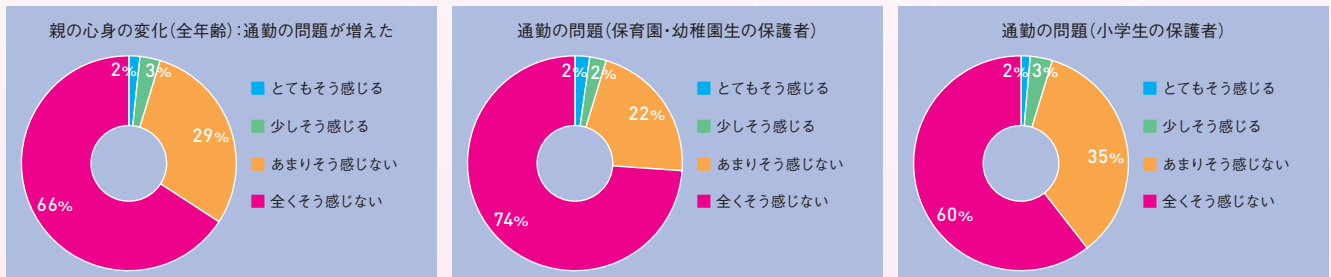
(保護者：食欲が変化したか)

全年齢の23%が食欲の変化があったと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者の間に統計的な差はなかった。



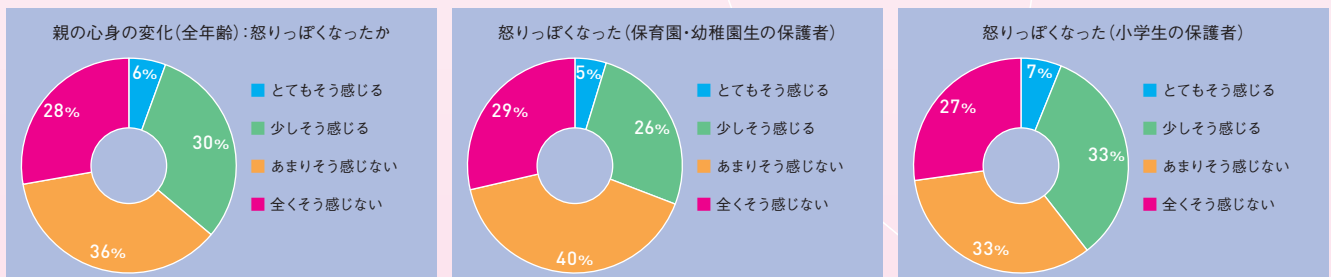
(保護者：通勤の問題が増えたか)

全年齢の5%が通勤の問題が増加したと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者の間に統計的な差はなかった。



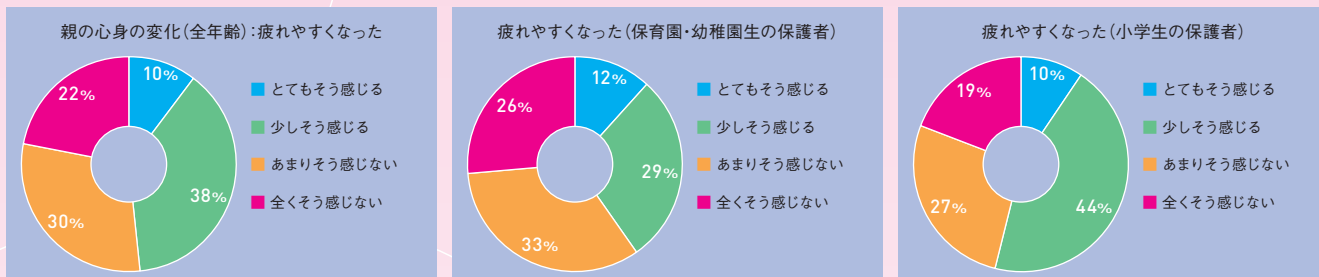
(保護者：怒りっぽくなったか)

全年齢の36%が怒りっぽくなったと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者の間に統計的な差はなかった。



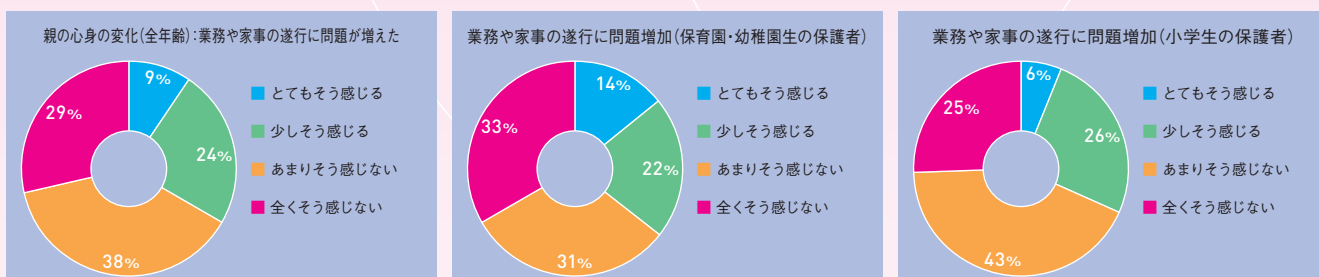
(保護者：疲れやすくなったか)

全年齢の48%が疲れやすくなったと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者の間に統計的な差はなかった。



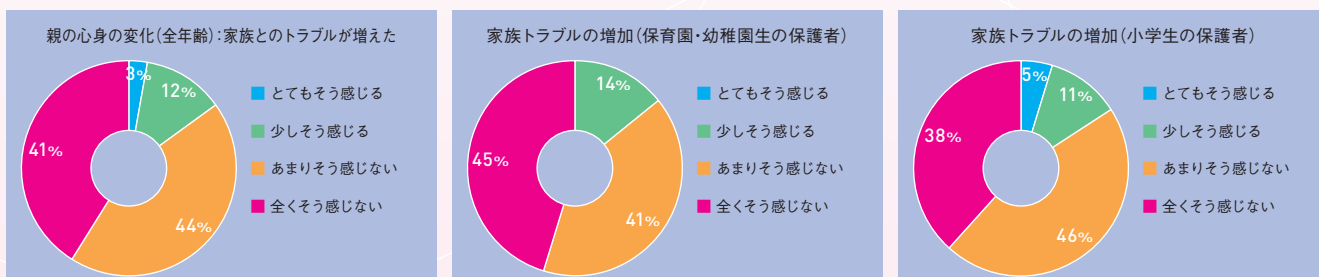
(保護者：業務や家事の遂行に問題が生じたか)

全年齢の33%が業務や家事の遂行に問題が生じたと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者の間に統計的な差はなかった。



(保護者：家族とのトラブルが増えたか)

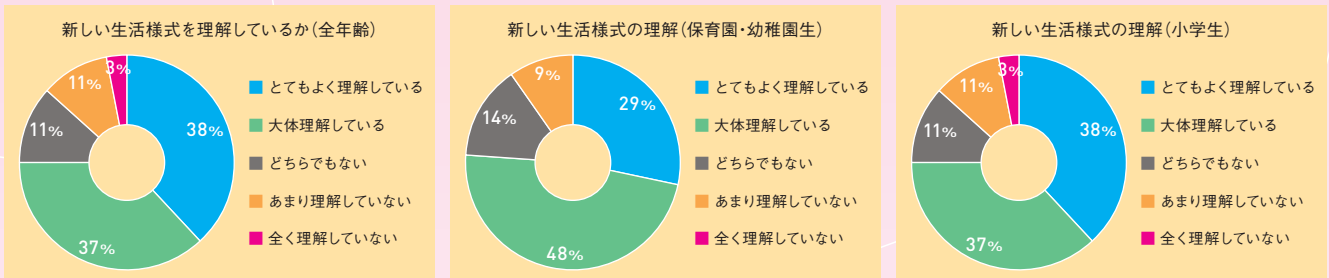
全年齢の15%が家族トラブルが増えたと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者の間に統計的な差はなかった。



D. 新しい生活様式に向けて

D-1. 子どもは新しい生活様式を理解しているか？

全年齢の75%の子どもが「とてもよく理解している」「大体理解している」と回答した。未就学児と小学生の間に統計的な差はなかった。



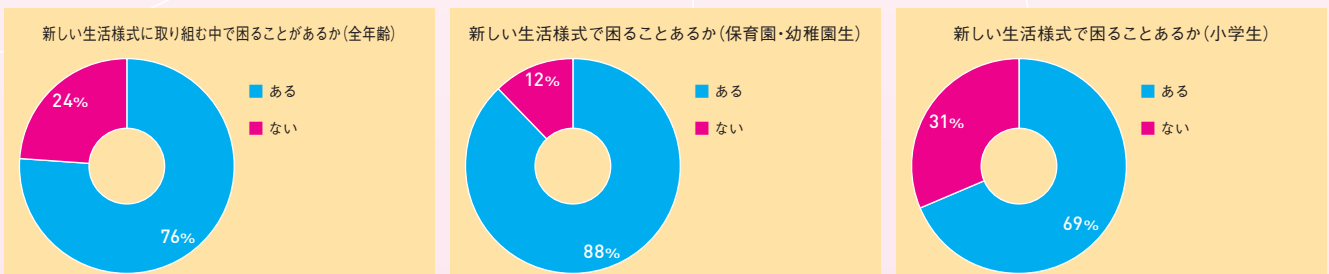
D-2. 新しい生活様式で困ること

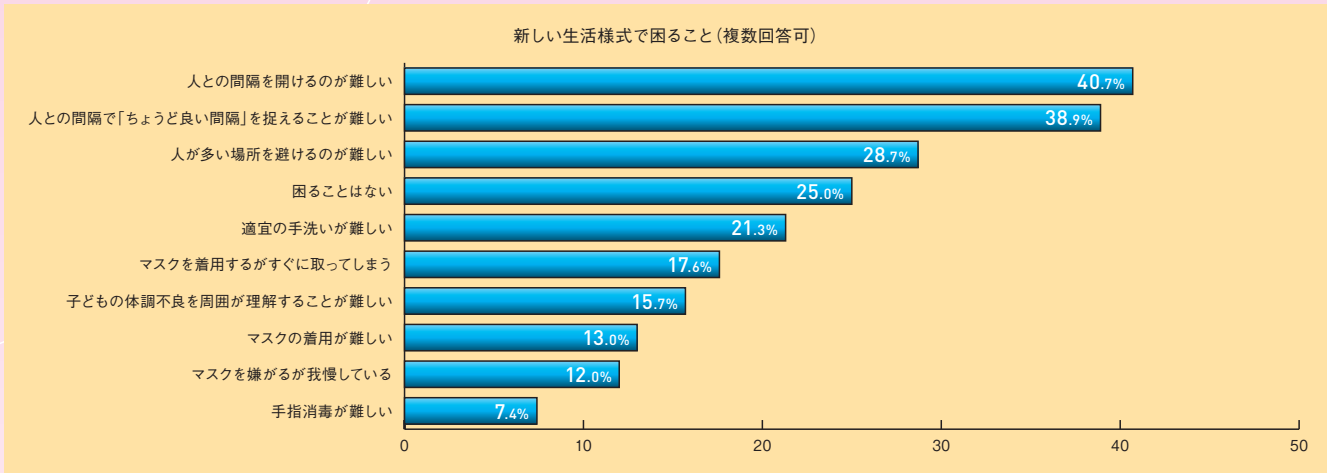
全年齢の76%が困ることがあると回答した。小学生の69%に対し、未就学児は88%とより高い割合で困りごとがあると回答した。

全年齢における困ることの内容は、複数回答で40.7%が「人との間隔を空けるのが難しい」と回答した。それに続き「ちょうど良い間隔を空けることが難しい:38.9%」「人の多い場所を避けることが難しい:28.7%」と、適切な距離感を掴むこと、距離を空けることの難しさを感じている回答が多かった。また、「マスクの着用が難しい」「マスクを着用するがすぐにとってしまう」などマスクの着用に関わる困難を持つ児童も10～20%ほどいることが示されている。

一方で25%が「困ることはない」と回答した。「困ることはない」という回答には学年差があり、小学5・6年生は他の年齢に比べ「困ることがない」と回答したものが有意に多かった。少数ではあるが自由記述でも「家にいることが増えのびのびしている」という回答もあった。子どもの年齢や生活スタイルによっても困り感は異なるものと想定される。

年齢による困りごとの内容を比較すると、未就学児は小学生に比べ「ちょうど良い間隔を空けることが難しい(未就学児:53.7%,小学生:31.3%)」「マスクをとってしまふ(未就学児:34.1%,小学生:9.4%)」「マスクの着用が難しい(未就学児:26.8%,小学生:4.7%)」「マスクを嫌がるが我慢させている(未就学児:19.5%,小学生:4.7%)」の項目への困り感が高かった。未就学の児童は人との距離感、マスクの着用に関する難しさが挙げられている。



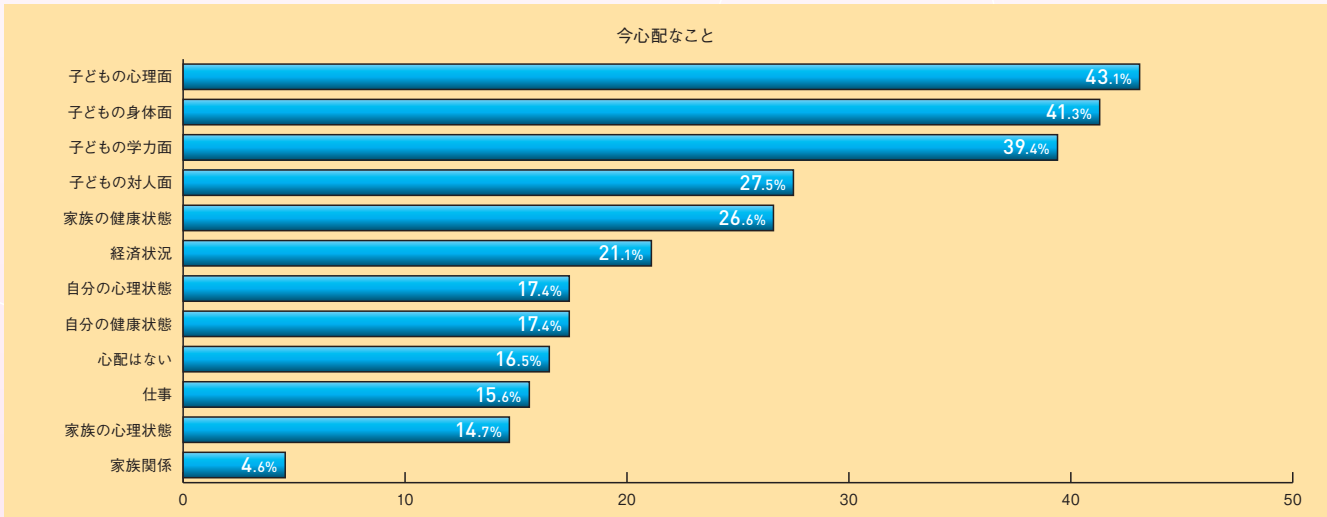


(困ること：自由記述)

- ・夢中になると近づいてしまう等人との距離を保つことが難しい
- ・手洗いはするがうがいは難しい
- ・習い事などで送迎バスを使用するが内心嫌な気持ちもある
- ・色々触らせないので、物が汚いという意識が強くなりすぎてしまう
- ・色々なものを触って、つい手を口に入れてしまう
- ・指しゃぶりするようになった
- ・家にいてのびのびしている

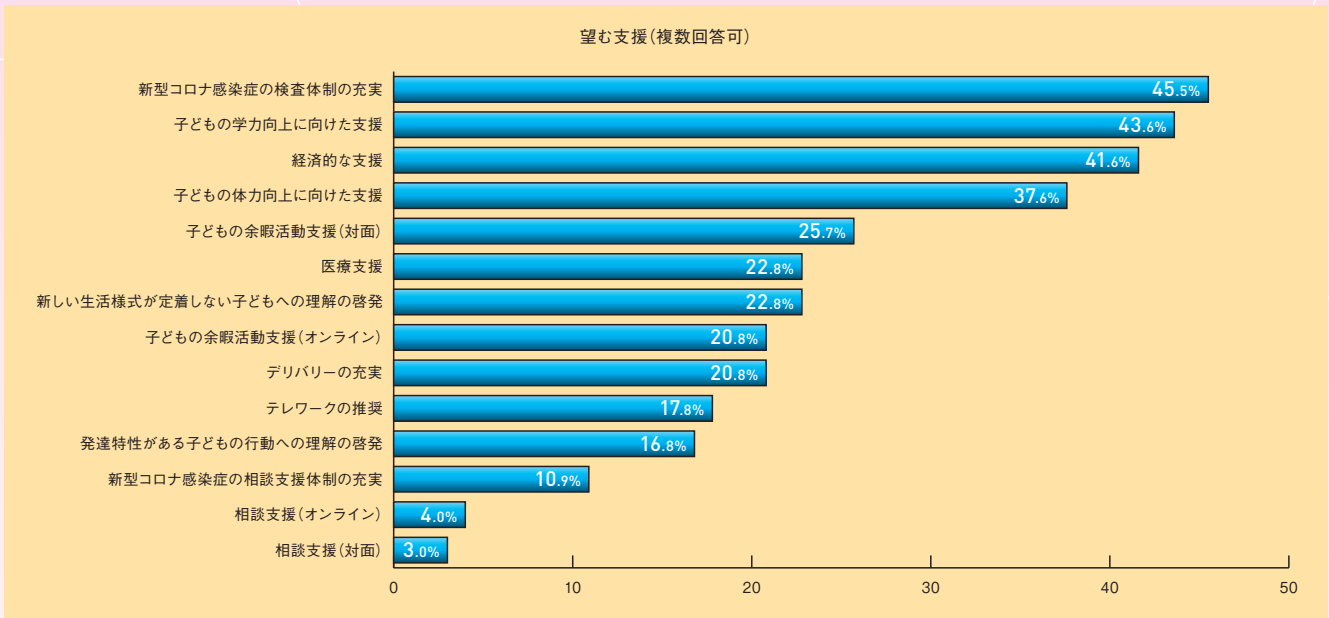
D-3. 心配なこと

今心配なこととして、43.1%が「子どもの心理面」をあげた。次いで、「子どもの身体面」「子どもの学力面」「子どもの対人面」が高い割合で困りごととして挙げられた。また20%弱の対象者が自分の心理状態や健康状態が心配であると回答している。保護者は子どもを育てる親としての役割がある一方で、自分自身の健康や精神面も維持していかなければならない。保護者の支援も必要である。



D-4. 望む支援

新型コロナウイルス感染症の検査体制の充実が45.5%の割合で選択され、最も望まれていることがわかる。経済的な支援も41.6%と高く、医療経済など家庭の基盤を支える支援が望まれている。また子どもや育児に関しては「学力向上に向けた支援」「体力向上に向けた支援」「余暇活動支援」など学習面、身体面、余暇など全般にわたる支援が望まれている。



(望む支援：自由記述)

- ・子どもの学力向上のための支援員の増員
- ・毎日着用する制服の見直し
- ・感覚過敏でマスク着用が難しい子どもへの理解
- ・マスクと消毒液の支給
- ・新型コロナウイルス感染症検査費用を安くしてほしい

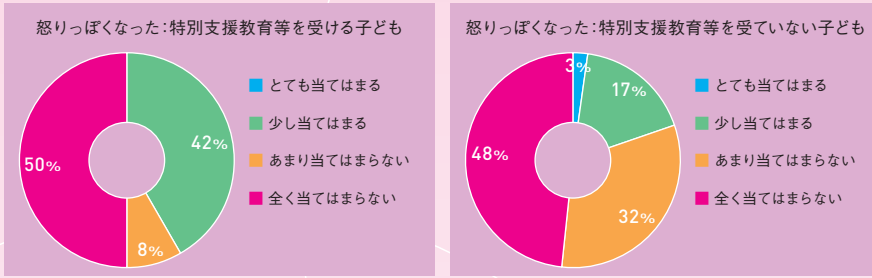
E. 特別支援教育等を受ける子どもたち・保護者について

特別支援教育や福祉教育サービスを受ける子どもたち及び保護者とそれらサービスを受けていない子ども及び保護者と比較したところ、特別支援教育等を受ける子どもとそうでない子ども間で「子どもが怒りっぽくなった(特別支援教育等を受けている児童：42%, 特別支援教育等を受けていない児童：20%)」「保護者がとても疲れやすくなった(特別支援教育等を受けている児童の保護者：29%, 特別支援教育等を受けていない児童の保護者：5%)」「新しい生活様式を理解しているか(特別支援教育等を受けている児童：41%, 特別支援教育等を受けていない児童：85%)」「新しい生活様式で困ること：マスクを取ってしまう(特別支援教育等を受けている児童：37%, 特別支援教育等を受けていない児童：14%)」の4項目に統計的な差があった。

さらに、年齢による変化に注目すると、特別支援教育等を受けない子どもでは、未就学児に比べて小学生では「新しい生活様式で困ることがある」項目が低くなることに対し、特別支援教育等を受ける子どもでは未就学児と小学生で新しい生活様式上の困りごとが減少しなかった。特別支援教育等を受ける子どもは、年齢が上がると困りごとが減るというわけではなく、子どもの持つ行動特性など個々の状況によって困り感も変わるのではないかと考えられる。新しいことや変化に対応することに時間がかかったり、それ自体が難しい子どもたちもたくさんいる。子どもと家族を支えるためには、社会の理解が必須である。下記に差があった項目のデータを示す。

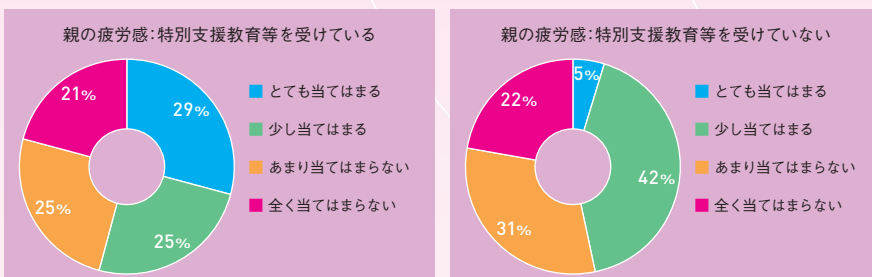
(子どもが怒りっぽくなった)

特別支援教育等を受ける子どもは42%とより高い割合で怒りっぽくなったという回答が多かった。



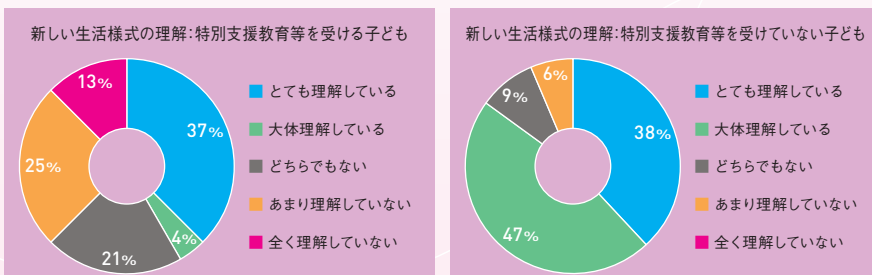
(保護者の変化:保護者が疲れやすくなった)

特別支援教育を受ける子どもを持つ保護者は、「疲れやすくなったか?」という問いに「とても当てはまる」という回答が29%と多かった。



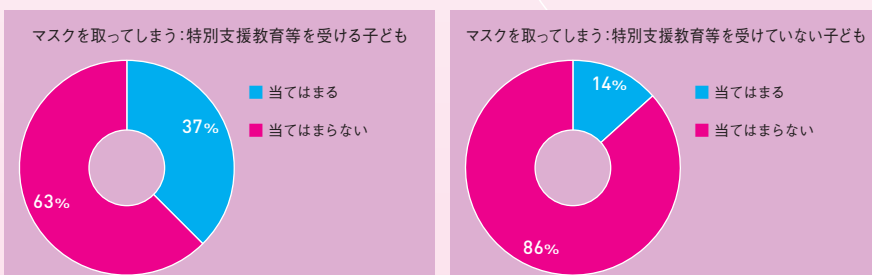
(新しい生活様式を理解しているか)

特別支援教育等を受けていない子どもの85%が理解していると回答していることに対し、特別支援教育を受けている子供は41%が理解していると回答した。



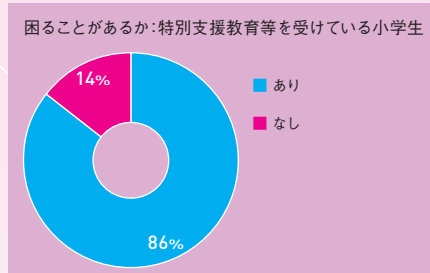
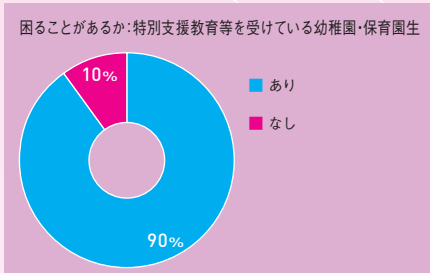
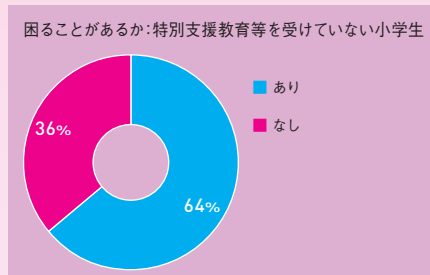
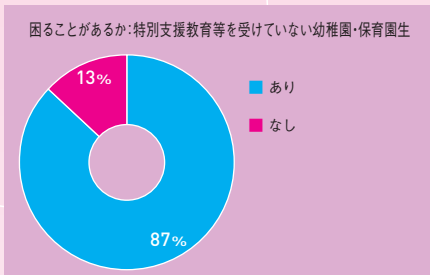
(新しい生活様式で困ること:マスクをとってしまう)

新しい生活様式の中で「マスクを取ってしまう」ことがあると答えたのは、特別支援教育等を受けていない子どもでは14%だったが、特別支援教育を受けている子供は37%とより高い割合でマスクを取ってしまうことがあると回答した。



(新しい生活様式で困ることがあるかどうか：年齢による比較/特別支援教育等を受けているか)

特別支援教育等を受けていない場合は、未就学では困りごとが多いが小学生になると減少している。一方で、特別支援教育等を受けている場合は、小学生も未就学児と変わらず同程度の困りごとがある。



4. 調査結果のまとめ

(子どもへの影響)

感染拡大による子どもの変化については全年齢では65%と半数以上の割合で生活が変化したことが示された。生活上の変化の詳細を検討すると、家で過ごす時間、家族で過ごす時間、テレビやPC、タブレットなどメディアとの接触、家族と過ごす時間が増えていることがわかる。家にいる時間とテレビ視聴時間の増加は年齢に限らず見られているが、小学生においてより顕著にPC、タブレット、スマホ、ゲーム等メディア使用時間の増加がみられる。

子どもの心身の変化については、全年齢の41%で子どもの心身の変化が感じられていることが示された。年齢差があり、未就学児は22%に変化が感じられていることに対して、小学生では54%と半数以上の割合で心身の変化が感じられていることが示された。

心身の変化の詳細を検討すると、変化が多い順では「甘えることが増えた(40%)」「怒りっぽくなった(25%)」「睡眠の問題が増えた(24%)」「学習上の問題が増えた(22%)」「疲れやすくなった(22%)」であった。加えて、約10%が家族や友人とのトラブルの増加、身体不調の訴えの増加を示しており、コロナ感染症拡大以前と比べて子どもの情緒および行動に変化があったことが示されている。これらの傾向は小学生でより顕著であった。

(保護者への影響)

対象者の半数以上の保護者が育児負担が増加したと感じていることが示された。未就学児に比べ小学生を育てる保護者の方に多く育児負担の増加が感じられていた。心配事や疲労感、心身の不調は子どもの年齢によらず増加していた。生活の負担に関しては、62%の保護者が生活の負担が増加したと回答した。感染拡大状況下での生活の長期化を受け、保護者の負担は強くなっていることが示されている。

保護者の心身の変化の詳細を検討すると、変化が多い順では「心配事が増えた(61%)」「疲れやすくなった(48%)」「身体的な不調が増えた(37%)」「睡眠の問題が増えた(30%)」「怒りっぽくなった(36%)」「業務や家事の遂行に問題が生じた(33%)」であった。加えて、約15%が家族とのトラブルが増加したと回答している。コロナ感染症拡大以前と比べて、保護者の心理的な負担は増えており、情緒及び行動上の問題が増えていることがわかる。新型コロナウイルス感染症との付き合いはまだ続くことを考えても、保護者の負担軽減を狙った支援が求められる。

(新しい生活様式上の困難)

全年齢の75%の子どもが生活を変化させなければならないことは理解しているが、同時に、全年齢の76%が新しい生活様式上で困ることがあると回答した。困ることは未就学児により多かった。

具体的には、40.7%が「人との間隔を空けるのが難しい」と回答し、それに続き「ちょうど良い間隔」を空けることが難しい:38.9%」「人の多い場所を避けることが難しい:28.7%」と、適切な距離感を掴むこと、距離を空けることの難しさを感じている回答が多かった。また、「マスクの着用が難しい」「マスクを着用するがすぐにとってしまう」などマスクの着用は何らかの困難を持つ児童も10～20%ほどいることが示された。

また、特別支援教育等を受ける子どもたちは、マスクの着用や生活の変化への理解とそれら変化への対応に苦労している可能性が示された。同時に保護者の疲労感もとても強い。マスクを着用すること等変化に対応することが難しい子どもたちもいることを社会が理解する必要がある。

5. 考察と展望

1) 子どもの心身の変化についての理解 甘えやイライラの背景に目を向けた声かけ

約半数の子どもたちに情緒行動面の変化が表れていることが示された。この傾向は小学生に顕著であった。小学生は行動範囲が広がり、一人でできることも増え、クラブ活動や少年団、地域活動や習い事など家庭外での活動も増えていたと考えられる。新型コロナウイルス感染症拡大を受け、それらの多くが中止や延期を求められることになった。生活の変化は小学生の方が大きかったことが予測される。

情緒行動面の変化の内容としては、甘えやイライラが多く示されていた。甘えの表現は多様であり、身体接触を求めるようなダイレクトな行動から、普段はしていることを他者にしてもらおうとする依存的なもの、身近な相手にイライラをぶつけるというものもあるだろう。大人からすると、子どもが自分でできることをしない行動に当惑するだろう。しかし、これらの表現は、子どもがストレス状況下で示す自然な行動である。「甘えやイライラは、ストレス状況下では自然な行動であること」を改めて認識し、甘えやイライラの背景にある不安や不満に目を向けた声かけや対応が必要といえよう。また、学校が積極的に子どものストレスや心身の状態を把握したり、ストレスマネジメント教育などを取り入れることなども有効であろう。

2) 保護者の負担感、疲労感の増加への理解 生活の中に積極的に気晴らしを

半数以上の保護者の育児負担感が増加していた。育児負担の増加は小学生を育てる保護者の方に多く見られた。また、保護者は心配事が増え、疲労感や心身の不調も増していた。これら保護者の疲労感や不調感は子どもの年齢によらず増加していた。外食などがままならない中、家族が家にいる時間が増え、家事が増えたということも影響していると考えられる。保護者の心配事には雇用や家庭の経済状況など、子育てに限らず、生活全般の不安もあるものと想像される。

新型コロナウイルス感染症との付き合いはしばらく続くことが予測される。疲労は蓄積されると慢性的な心身の不調に発展する可能性もある。保護者は疲れているということ、または疲れが蓄積しやすい状況であるということを再認識し、自分へのハードルを下げることで、負担を減らすことを主眼に生活を見直す必要があるかもしれない。ぜひ積極的に自分を癒す、いたわる行動や気晴らしを生活の中に組み込むことを検討いただくと良いかもしれない。短時間で良いので心配事を整理する時間を持つことも有効だろう。合わせて、できれば負担感を身近な人に伝え、分かち合う方法もあるだろう。その前提として保護者の負担感に対する社会の理解が必要であろう。

3) 新しい生活様式の定着が難しい子どもたち、幼児の理解の促進

新しい生活様式が必要なことは多くの子どもたちが理解していた。しかし、人との距離を適切に保ったり、マスクを着用したりということが難しい子どもたちも多いことが示された。これらの傾向は未就学児に多く見られ、また未就学児の保護者に新しい生活様式上の困りごとが多かった。保護者の言い聞かせにより、マスクの必要性や人との距離の必要性は頭では理解できても、それを実行するということは容易なことではない。特に外出で気分が高揚していたり、興味があるものが目の前にある時などにはより困難であると想像される。幼児の行動と家族に対する社会の理解が必要である。

4) 特別支援教育等を受ける子どもたちへの理解 マスク着用が難しい子どもの理解の促進

特別支援教育や福祉教育サービスなどを受ける子どもたちも高い割合でマスクの着用に困難が見られた。マスクは着用できた方が望ましいが、それが理解はできても実行が難しい子どもたちがいる。年齢によらず、感覚の過敏を持つ子どもたちなど、マスクをすることが耐えがたい子どもたちがいるということを社会が理解し、マスクの着用が困難である子どもや保護者が過度に負担感を感じなくて良いような雰囲気求められよう。

5) 家族トラブルの増加への対応の必要性 早めの相談と相談支援の拡充を

約 10～15% の割合で家族トラブルの増加が示された。潜在的にはもっと多くの割合で家族トラブルが増加していることが考えられる。感染拡大状況下では外出が制限され、自分らしい活動が思うようにできずに家で過ごす時間が増加した。不満を抱えた者同士が近くにいる家庭環境では、きょうだいや親子、夫婦などの近い関係でトラブルが増加することは自然なこととも考えられる。家族内の揉め事は抵抗感があるため相談しにくい内容でもある。さらに家庭のことは家庭外からは把握が難しい。社会的に大きな変化があったこの状況下では家族トラブルの増加は自然なことであり、多くの家庭で起こっているということを知り、できれば家族間のトラブルも身近な方に伝えることで風通しを良くするという方法もあるだろう。合わせて、オンライン相談など家族支援の拡充も必要であろう。

6. あとがき

本調査を実施し、感染拡大が子どもや保護者に与えた影響の一端が示されたと考えられる。感染症との付き合いは今後も続いていく。本調査が子どもの現状の理解に寄与することを願っている。なお、感染症の状況は変化しうるものである。今後も子どもや保護者の負担感を時間的な変化とともに捉えていくため、本調査の第2期を2021年3月に実施予定である。ぜひご協力をお願いしたい。

7. 調査の呼びかけにご協力いただいた機関

下記の機関に調査呼びかけのご協力を賜りました。ありがとうございました。

奄美地区障がい者等基幹相談支援センター

いじゅういんきた保育園

鴨池幼稚園

霧島市子ども発達サポートセンター

特定非営利活動法人ハッピー

南日本リビング新聞社（アイウエオ順）

8. 調査実施者

鹿児島大学そだちサポートプロジェクト（本調査担当：高橋佳代・今村智佳子・平田祐太郎）

なお、本調査は JSPS 科研費 20K02209 の助成を受け行われたものです。



本報告書はホームページでも公開しています。QRコード、URLをご利用ください。

鹿児島県における
新型コロナウイルス感染症拡大が子育て及び子どもの生活に与える影響に関する
調査報告書(第1期：2020年8月)

発行日 令和2年11月25日

発行者 鹿児島大学そだちサポートプロジェクト

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30

E-mail amamisodachi@gmail.com

URL <https://sodasapo.jimdofree.com>

